平成31年３月20日発行

鹿児島県立博物館

鹿博だより

No. 100

悪石島のボゼ

旧暦７月16日，トカラ列島悪石島に現れる仮面神ボゼは，島に自生する植物を身にまっています。多様な自然の恵みを，文化や風習に利用している例として，本館３階に常設展示されています。甑島のトシドンや薩摩硫黄島のメンドンとともに，平成30年11月「来訪神　仮面・仮装の神々」の一つとして，ユネスコ（国連教育科学文化機関）の無形文化遺産に登録されました。

「仕事じゃないんだから真剣にやれよ」

館長　　福永　広隆

■仕事

勤務時間に川に行った。網を両手に夢中になった。「こんなことしてていいの？遊んでいるようにしか見えないけど」ふと我に返る。

「これはれっきとした資料収集です。」

捕まえたトビハゼをバケツに入れながら学芸員は言った。博物館の仕事は，集めて，調べて，見せて，教えること。少しのむずがゆさはあったが，「仕事」だけは続けた。収穫は半日で３匹。

幸せな時間はあっという間に過ぎる。きつくても真剣に取り組むのが「仕事」で，楽しいんだけれどあまりタメにならないのが「遊び」というのが大人としての常識だった。

■勉強

そういえば，最近，虫取り網をもって走り回る子どもの姿を見ない。どうすれば捕まえられるかを主体的に考え，試行錯誤を繰り返しながら虫たちと対話し，失敗してもあきらめずに深く考える。

正解のない答えを探して，腹の虫が鳴いても，カラスが鳴いても気にせずに。やがて，親や先生たち大人に叱られる。

「遊んでばっかいおらんで，ちった勉強せんか！」

■遊び

私たちはいつでも「遊び」に真剣でありたい。遊びには，変化が激しくなるこれからの時代を生き抜く力が詰まっている。遊びには，私たちの脳をワクワクさせる「幸せ」もたくさん詰まっている。

私たちは，一人でも多くの人が博物館に遊びに来て，一人でも多くの人がこの幸せを手に入れることを願ってやまない。

※タイトルは，ゴルフの集合時間に遅れてきた若手芸人に大物芸人が発した言葉

中・高校生ボランティアの会「博物館秋まつり」

平成30年度は，中・高校生ボランティアの会に22名が登録しています。これまでは，実験の準備や補助など裏方的な活動が中心でしたが，会員がより主体的に活動できるように，ボランティアが企画・運営する「博物館秋まつり」を10月7日（日）に開催しました。「当日は，会員が準備したオリジナルの実験を行ったり，ヘビやイモリのふれあいコーナーで子ども達を生きものに触れさせたり，展示やプラネタリウムの解説なども行いました。職員顔負けの丁寧で，堂々とした接客がお客様から大変好評でした。延べ3000人の利用者があり，ボランティア会員にとっても，充実したイベントとなりました。来年度も開催したいと思います。

秋まつりポスター

スライム作りを解説中

ヘビとのふれあい

超低温実験

企画展 「かがやく石の世界」

石ってちょっと地味なイメージがありませんか。でも，よく見てみるとキラキラ光る石，不思議な形をした石，紫外線を当てると妖しく光る石など面白い石がたくさんあります。よく知られているアンモナイトなどの化石も実は石になっているのです。

博物館では３月23日から６月９日の期間，石に関する企画展を行っています。

不思議な石の世界をちょっとのぞいてみませんか。また，展示室には石に絵を描くストーンペインティングのコーナーもあります。皆さまのご来館をお待ちしています。

紫水晶（水晶の仲間で鹿児島にもあります。２月の誕生石としてもよく知られています。）

砂漠のバラ

アンモナイト化石

ストーンペインティング

＜学ぼう郷土の自然　移動博物館事業＞

県立博物館では，平成７年から移動博物館事業を展開しています。鹿児島の自然，特に「本物に触れる」という体験をして欲しいという願いを込めて行っています。平成30年度は10月31日から11月１日に出水養護学校，12月６日～９日に瀬戸内町きゅら島交流館にて開催しました。

【出水養護学校】

体育館を会場に剥製や標本など，約3000点を展示しました。生徒達は，剥製や標本などを，注意深く観察していました。

展示会場

展示の中で一番人気だったのは，剥製や岩石などをさわることができる「さわっていいよ」のコーナー。その中でも生きているアオダイショウやイモリは，人だかりができるほどでした。

アオダイショウ

展示の他に実験教室も行いました。マイナス196℃の液体窒素を使った「とほうもなく冷たい世界」では，バラの花が一瞬で凍りつき，バラバラになる様子に驚きの声があがっていました。また，音の鳴るパイプ等を使った「音の世界」では，長さの違いで音程の変わるメロディーパイプを使った演奏も楽しんでいました。

【瀬戸内町】

移動博物館での通常展示物に加えて，「郷土の自然紹介」として奄美大島の自然を取り上げて展示しました。また，今回から「ミュージアムトーク」を展示物の前で行い，解説に書ききれなかった情報を，直接来館者にお届けする機会を設けました。

地質面では，奄美大島の基盤は太平洋海底に沈んだ堆積物が，プレートの移動によって蓄積した「付加帯」と呼ばれる堆積岩からなること，そしてその証拠が瀬戸内町など奄美大島南部で見られるチャートと呼ばれる岩石であることを紹介しました。火山によって島ができたとばかり思っていた来館者には，予想外だったようです。

動物面では奄美に特有の動物や昆虫を紹介しました。特に瀬戸内町請島に分布するウケジママルバネクワガタは，名前を知っていても実物を見る機会はほとんどなく，多くの来館者が見入っていました。

植物面では，瀬戸内町在住であった前田芳之氏の功績として，アマミアセビとカンアオイ類について解説しました。地域の自然に注目して調べることにより，新種発見や種分化の謎に迫るなど，地元の方が貢献していたという事実を初めて知る方が多く，良い機会となりました。

郷土の自然紹介コーナーにて，学校が準備したワークシートを完成させる古仁屋中学校３年生

学芸室の窓から

私はこれまで離島の昆虫相の解明に力を入れてきました。その中で強く意識したのが，カルデラ形成を伴う破局的噴火の歴史です。約30万年前に霧島山系で起こった加久藤カルデラ，約10万年前の阿多カルデラ，約２万９千年前の姶良カルデラ，約7300年前の鬼界カルデラと，南九州はたびたび大きな火山噴火に見舞われました。そのたびに生物は消滅したり，再侵入したりという歴史を繰り返しており，その結果現在の分布を示しています。

例えば，鬼界カルデラの北側に位置する三島村の竹島・硫黄島は，7300年前に全ての生きものがいなくなった後，海を越えてやってきた昆虫たちが分布していると考えられます。海を越えることができるチョウで比較しても，カルデラから少し離れた黒島に比べて，竹島・硫黄島に分布する種数は２／３程度に減少します。このような視点で考えると，九州山地まで分布するキュウシュウエゾゼミやウラキンシジミなどが霧島以南に分布しないのも，30万年前加久藤カルデラに関連した噴火の影響かもしれないと想像できます。

カルデラの中心では生物は消失したと思われますが，周辺部では生き残り，それらが再侵入すると考えられます。その様子を見たいと思い，2015年５月に噴火した口永良部島で調査しました。噴火１年後に，火砕流のあった向江浜で調査する許可を得て，特に移動性の低いアリ類について調べました。すると，100～400℃程度の木々を焦がさない程度の比較的低温な火砕流だったこともあり，火砕流が流れた地域にミナミオオズアリなど，攪乱地を好むアリが生き残っていました。したたかに生き残る生きものたちの姿に，驚く経験でした。

口永良部島向江浜の火砕流跡地（2016年4月28日撮影）

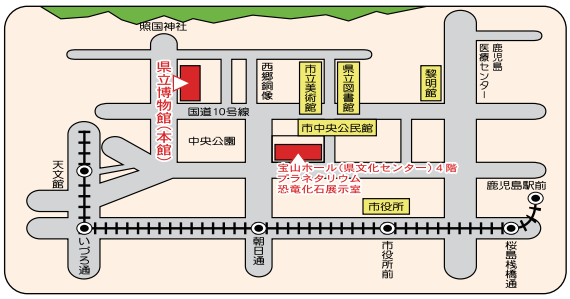
展示紹介

インギー鶏

昨年４月にリニューアルした本館3階の常設展示は，生物多様性を中心とした内容に大きく変わりました。その中で，「遺伝子の多様性」の例として，原種のセキショクヤケイから品種改良して作り出された様々なニワトリの品種を紹介しています。展示物としては，薩摩鶏や地頭鶏（ジトッコ）などと共に，リニューアルを機に新たに作られたインギー鶏の剥製標本もあります。

インギー鶏の剥製標本（左メス，右オス）

インギー鶏は，1894年に漂着したイギリス船ドラメルタン号によって，種子島に伝えられました。一風変わった名前は，当時の島民がイギリス人のことを「インギー」と呼んでいたことに由来しています。尾羽がないように見える，珍しい特徴をもつ品種です。学術的にも貴重なため，2013年に県の天然記念物に指定されました。

展示を作るにあたって，一つ困った問題がありました。インギー鶏が飼育されているのは種子島だけで，しかも天然記念物に登録されている個体数は非常に少なく，剥製標本に適した個体をなかなか入手できませんでした。そこで，天然記念物として登録されていない純血種の集団から2個体を譲り受けることで，ようやく剥製標本を作ることができました。貴重な資料を提供していただいた南種子町インギー鶏育種会の柳田和則氏と，ご協力いただいた南種子町教育委員会に，深く感謝を申し上げます。

●鹿博だより　編集・発行 鹿児島県立博物館
〒892-0853　鹿児島市城山町１番１号
TEL 099-223-6050　FAX 099-223-6080
ホームページ　http://www.pref.kagoshima.jp/hakubutsukan/